

ゴロねこニヤン吉奮闘
記

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女の子を助けようと奮闘する、ニヤン吉の物語。

目次

ゴロねこニヤン吉奮闘記

—
1

ゴロねこニヤン吉奮闘記

シーシー

昼食を終えたニヤン吉は、木陰でゴロゴロしながら、爪楊枝で歯の掃除中。今、ご馳走になった焼き魚は、農業を営む山田さんちの。

少し開いてた台所の窓から忍び込んで失敬したもの。

悪いと思いつながら、腹ペコになったら、理性も常識もへったくれもねえ。

あくあく、満腹、満腹。さて、めしも食ったし、昼寝でもするか……。

スヤスヤ……

グーグー……

ガーガー……

グアーツ！ガアーツ！

なっ！なんだ？……ああ、ビックリした。

自分のいびきで飛び起きたニャン吉は、よだれを拭きました。

「わーい、わーい！川遊びだ。うれしいな」

ん？桃色のワンピース水着を着て、浮き輪を腰につけた人間様のガキンちよが、両親に手をつながれて、楽しそうにはしゃいでら。

……こんな俺らにも父ちゃんと母ちゃんは居たんだろ。ま、気にすることはねえか……。俺様は俺様だ。

はあ……。なんだよ、ため息なんかつきやがって、みつともねえ。弱音なんかはいたら、ゴロねこニャン吉の名がすたるつてえもんだ。このへんじゃ、ちつとぼつか名の知れた俺様――

「キヤーッ！」

ん？あの悲鳴は、さっきのガキンちよだ！

ニャン吉は、ゴロゴロから一転して、機敏に身を起すと、猛スピードで駆け出しました。

川まで行くと、浮き輪をつけたガキンちよが滝壺のほうに流されていました。

「タマーっ!」

ガキンちよのママが、泣き叫びながら、名前を呼んでいます。

ん? タマ? 元カノと同じ名前じゃん。

「タマコーっ!」

ガキンちよのパパが名前を呼びました。

ん? ……コがつくのか。ま、いいや

ニヤン吉はピューマのように、しなやかに走ると、流されているガキンちよ、タマコに追いつきました。

タイムングよく、そばにあったぶつとい木のツルにぶら下がると、ターザンのように、

「ニヤ〜ニヤ〜ニヤ〜♪」

と、おたけびを上げながら、空中ブランコのように宙に舞い上がりました。

そして、滝壺に落ちる寸前のタマコの腕をネコ手でつかみ、川辺に上げると、

「……ヒック、……グズツ……ネコがたすけてくれたの? ヒック」

泣きじやくるタマコは、ヒックヒック言いながら、目をこすりました。

「ああ。だが、パパとママには内緒だよ。どっちみち信じちやもらえないだろうがな」

「わか……ヒック……った」

「じゃあ、あばよ」

「ありが……ヒック……どう」

「何い、いいってことよ。持ちつ持たれつだ」

「?……ヒック」

「じゃあな、あばよ」

ニャン吉はそう言い残すと、林の中に消えていきました。

「タマコー!」

「タマちゃん!」

パパとママが走ってきました。

「大丈夫?ああ、無事でよかったわ。……誰に助けてもらったの?」

ママがタマコの頭をなでました。

「……ネコ」

タマコの言葉に、パパとママは顔を合わせました。

「……とにかく、よかった」

「ほんと、ケガがなくてよかったわ。さあ、帰りましょう」

パパとママがタマコの手を握りました。

「……しろくろのぎっしゅ」

タマコの言葉に、パパとママは目を合わせると、互いに作り笑いをしました。

「……しゃべったの。オスのネコ」

タマコの言葉に、パパとママは目を合わせると、またまた作り笑いをしました。

つたく、ネコ騒がせなガキんちよだぜ。お陰で昼寝もろくすっぽできないかった。

さて、晩飯は誰んちのを失敬するかな……。山田さんちばつかじや悪いから、林業の吉田さんちにするか……。

では、それまで一寝入り、つと。

「……しろくろのオス」

ん？タマコの声だ。

「ずんぐりむつくりのぎつしゅ」

つたく、助けてもらって、その言いぐさはねえだろ？よりによって、ずんぐりむつくりの雑種だなんて。

嘘でもいいから、血統書付きのシヤムとかペルシヤとかって、言ってほしかったなあ……。

「つまようじ、くわえてた」

トホホ……そこまで言うかあ。

おわり